

令和7年度第1回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会 議事録（要旨）

- 日 時： 令和7年4月22日（火） 午前10時30分から11時45分まで
- 場 所： 市立病院北館7階ホール1
- 出席者： 理事長 清水 恒広
理 事 岡野 創造、宮原 亮、半場 江利子、長谷川 一樹、
能見 伸八郎、山本 みどり、小畑 英明、高畑 重勝
監 事 長谷川 佐喜男
事務局 志摩経営企画局次長、下久保管理担当部長、川本経営企画課長

1 開会

2 報告事項

(1) 地方独立行政法人京都市立病院機構の組織改正について

資料1、資料2に基づき、事務局から報告。

(2) 月次収支報告（2月まで）

資料3に基づき、事務局から報告。

- 病院の努力により、昨年度より医業収入は増収したが、収益の改善に繋がっていないところに構造的な要因を感じる。京北病院の人件費の減少について、常勤医師の減とのことであるが、今後、補充予定なのか、それとも事業規模の見直しにより定数を削減されたのかどちらか教えてほしい。
 - 京北病院の常勤医師が定年退職されたことによる欠員であり、定数削減ではない。現在は常勤枠を応援医師で対応している。京北病院は外来を含め、一定、患者数はいるものの勤務地等の課題があり、常勤医師の確保が難しい状況である。常勤医師を含め、必要な診療の確保について引き続き、努力していく。
 - 京北病院の外科医師が定年退職されたため、外科の診療機能維持のため、京大、府立両大学病院に派遣依頼を行い、現在、応援医師2名に来ていただいている。一部、当直業務もしていただいている。
 - 京北病院については、常勤医師の給与費は減少したものの、応援医師の確保等で経費が上がっている。
- 市立病院の収支について、入院収入は微増で、外来収入は減少した要因について教えてほしい。
 - 入院医療への注力のための初診紹介制、再診完全予約制の導入により各診療科において外来患者数の適正化を進めていることから、外来患者数が減少してきている。
- 京北病院の収支について、外来収入及び診療所収入、訪問看護事業収入が減少した要因について教えてほしい。
 - 外来収入及び診療所収入については、京北地域の人口減少により、外来や診療所を受診する患者が減少してきていることが要因である。また、訪問看護事業収入については、訪問介護の対象となる患者が、市内などに引っ越しするなどの理由で減少してきていることが要因である。
- 厳しい経営状況については、市立病院固有の問題ではなく、国の診療報酬制度や補助金などの構造

的な問題があると思う。公的病院や総合病院などは、国や自治体からの支援がないと成り立たないような制度設計になっていると感じる。今回の人事異動は、京都市としても病院の経営の状況についての認識が高まり、何かしないといけないという決意を感じる。病院が自助努力をしないとイケないことは言うまでもないが、すでに病院全体で危機感をもって取り組んでいると思う。自助努力を積み重ねていって、どうしても足りない構造的な赤字については、設置者の支援が必要。収支改善に向けた緊急の取組について、またこの場で進捗状況を報告いただきたい。計画と実績との比較や、増収、増益が見える化をすることで、足りない部分に手を打ってイける。病院として改善に向けた取組を計画どおり進めることで、設置者に対して堂々と支援をお願いできると思う。PFI 事業の見直しについては、対策検討委員会を設置し、シミュレーションを行うなど、水面下で収支改善を模索していく必要がある。

- 診療報酬制度などの構造的な問題については、全国の病院が一丸となり訴えていく必要がある。一方で、当院の経営については病院の努力で改革していくことが大事であり、京都市にも、病院の努力について引き続き伝えていきたい。
- 今年度、6月から駐車料や個室料の値上げを行うが、そのような取組を今後も積み重ねていくことが大事である。PFI 事業については、様々な観点で整理していく必要があり、現在、委託項目の検証を行っている。仕分けを行ったうえで、今後どのようにアプローチしていくのかを検討し、お示ししていきたい。
- 収支改善の緊急の取組について、ソフト面では2月時点で8,200万円の収支改善効果が見られ、最終的には1億円を超える効果を見込んでいる。また、ハード面の収支改善として、本館の大規模空調改修を見送りにしたことで13億円程度の効果額を見込んでおり、合計14億円程度の効果額になる見込みである。

○ ダヴィンチ SP を導入したことによる効果について教えてほしい。

- 手術件数は前年度の1.2倍程度に増加している。

○ ダヴィンチ SP の導入は入院患者の増加や手術件数の増加にも繋がると思う。

- ダヴィンチ手術件数について令和4年度は239件、令和5年度は318件、令和6年度は387件であり徐々に増加してきている。また、産婦人科領域で昨年度からダヴィンチ SP による手術を開始したことにより手術件数が伸びてきている。
- 経営の話で言うと、今回の診療報酬改定では身体拘束をすると減算になるが、職員の努力により減算を防いでいる。医療の質も大事であり、増収にはならないが、高齢者が増加する中で、ダヴィンチ手術などの侵襲性が少なく、患者が安心して手術を受けられる治療を行うことが大事であると思う。情報共有になるが、調理師の確保が難しい状況があり、今後、院内で病院食を提供することが難しくなっていくと、栄養科から聞いた。病院食のセンター化を行い、配送を行うことになれば、PFI 更新の際に、厨房の冷凍環境や保温器材を整えるなどの検討も必要になってくる。
- 市立病院としてできる取組は積極的に進めていく。例えば、古いレントゲンフィルムが大量に倉庫に保管されており、フィルムは売却するとそこそこの金額になるので、経営状況を鑑みて検討していきたい。

○ 市立病院の専門外来についてももう少し広報してはどうか。収益には繋がりにくいかもしれないが、患者のニーズの観点からは専門外来はあってほしいと思う。

- 患者ニーズを調査したうえで、専門外来の広報について検討していきたい。

○ 事務局の組織改正は京都市との連携を強化するための人事配置か。

- そのように認識している。
- 京都市との連携を深め、両者で一体となり収支改善に取り組んでいくための人事配置であると理解

している。病院の状況について京都市と情報共有を行い、共に収支改善に取り組んでいきたい。

3 その他

○ 人員が足りていない部署はあるのか。眼科の外来診療において、以前は診療と検査結果が同一日に行われていたが、現在はそれぞれ別日に行われているようである。

→ 当院は初診紹介制及び再診予約制を導入しており、基本的には検査受診された日に結果をお伝えするよう取り組んでいるが、特別な検査を診療と別日に行う場合は、結果は後日、お伝えする流れになっている。眼科を含め、円滑な診療ができるように注視していきたい。

○ 市立病院の創立60周年記念事業について、株式会社ロマンライフとのコラボはどのようなきっかけで実現したのか。

→ コロナ禍に医療従事者への支援として、ロマンライフ様からお菓子の差し入れをいただいたため、前理事長とお礼訪問に伺った。その際、創立60周年記念事業のコラボ企画の提案をさせていただき、企画実現に至った。

○ 災害支援の学会で知り合ったハープ奏者の方がおり、被災地に出向いてボランティア活動をされているので、ご縁があればコラボ企画にも協力していただけたと思う。

→ 3月にフルート奏者の方に院内コンサートを無料で開催いただき、良いイベントとなった。また機会があればお声がけさせていただく。

○ 同じ京都市の独立行政法人である京都市立芸術大学にもコラボ企画を提案されるのも良いと思う。また、人間ドックの受診者数は増加しているのか。

→ 昨年度の年間受診者数は4,000人であり、1日当たり20人が受診されている。京都市の共済にPRを行うなど受診者数増加に向けた取組を行っている。

→ 第4期がん対策推進基本計画においてがんとの共生が求められており、がん相談について注目されている。相談支援センターは収入には繋がらないが、患者に有益な情報を提供している。今年度、国立がん研究センター認定がん相談支援センターに認定され、アピアランス支援モデル事業にも認定されたため、創立60周年記念事業の一環としてアピアランスをテーマにした企画を検討している。

4 閉会